

# 地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

2018  
ラオスへ

## ～開発の波にのみ込まれないように～

JVCの新規プロジェクトの概要と進捗状況の確認のため、11月11日から16日までJVC主催の支援団体向けスタディツアーに参加しました。以下にその報告と所感を述べたいと思います。

### プロジェクトを取りまく状況の変化

サワンナケート市内から幹線道路の国道9号線を通って支援地へ向かうと、沿道には、稻刈り後の牛の放牧という田園風景のなかに、工場が確実に増えているのが確認できた。広大な経済特区にも日本企業が10社前後進出。フォードやトヨタ、いすゞなど車の整備工場も目に付く。

市内から離れるにつれてユーカリ、サトウキビのプランテーションも大小さまざまな規模で見られ、それに伴う中国系の製紙工場、製糖工場もできていると今回案内してくれたJVC現地駐在員山室良平さんから説明を受ける。ピン郡の北側にあるオーストラリア出資の銅鉱山からタイに向かう大型トラックの隊列に何度も行きかう。

このように9号線を通るだけでも、ラオス政府が「援助より投資を」と呼びかけ、7%以上の成長率を続けて経済開発が進んでいるのが実感できる。

また、例えば外国人が村に入る回数まで制約され、市民団体に対する最近のラオス行政側の規制が厳しくなってきていることなどの説明を受ける。

### ピン郡アラン村でワークショップ

サワンナケート市内から2時間半ほどのピン郡の郡庁を表敬訪問。そこから数人の行政官も同行してアラン村に向かった。

しかし、村に入ってみると、都市部の変貌とは対照的に、どこの村でも人々の雰囲気は十数年前と大きくは変わらない。人々のゆったりした穏やかな物腰、親しげな笑顔、生き生きと楽しそうに群れて遊ぶ子どもたち…。

ここアラン村では、山室さんがラオス語で3時間にわたってワークショップを実施した。初めてのラオス着任後、2年足らずでここまでラオス語を操るようになった彼の努力に拍手。集

### CONTENTS

■2018ラオスへ～開発の波にのみ込まれないように～	1,2
■はじめてのラオス	3
■アジアを知ろう 森の中で森の話	3
■支援地から ネパール	4,5
■支援地から カンボジア	6
■地球の木と私	6
■おせち料理から世界が見える?! .....	7
■地球の木カフェ@茅ヶ崎	7
■よこはま国際フォーラム2019	7
■活動日誌	7
■インフォメーション	8
■編集後記	8



水浴び

まったく村人は男性20数人と、加えて女性も数人遠巻に参加していた。

アラン村は、93世帯、562人。田んぼで稻を栽培。  
森でタケノコ、キノコなどの採集。

これまで山室さんたちは既に3回ほど調査に入り、村の人口や歴史、井戸などの整備状況、トラクター・精米機等の所有状況、土地利用、祭りなどの年間行事、農業生産、地域に生息する生物、森林生産物の住民の利用状況などに関するデータを収集している。このデータをもとに、今後3年間の活動内容を村人と話し合って決めていくという段取りである。

JVCはこうした活動により、村人が自分の村の置かれた状況を客観的に理解して、その良さを認識し、外部者に問題点を訴えることができるようになることを目標と位置付けている。

このワークショップの中で、村からほんの10km程のところに建設中のセーラノン・ダムについての村人の不安が話題となつた。工事着工前に、どこからもなんの話もなかったそうだ。ダム予定地の下流にあるこの村では、水が濁りだして今は川の水を使わないようになるしかない。一方ラオス政府は、メコン川支流に今後まだ90以上のダム建設を計画しているという。



## アサパントン郡ノンハン村

141世帯、963人。田んぼで稻を栽培、村の川で漁をする。

林産物:タケノコ、キノコ他。

ノンハン村に着き、集会所のようなところに行った。村中に響く大きなスピーカーで繰り返し何が流れている。するとあちこちから村人が集まってきて、集会所はいっぱいになり、外にもたくさん女性たちが。

この村の概要を聞く。この村では近くに市場がないため、仲買人が買いに来る。売るのは米やキノコなどの林産物の他、織った布類、ココロギ、ツムギアリの卵…。

また幼い子どもたちが多かったので、「あおさんは何人?」と聞くと、若いお母さんたちは3、4人だが、年配の女性に聞くと、「たくさんよ」と。10人以上も普通で、しかしそのうち元気に暮らすのは半分くらいだそうだ。

ノンハン村では「乾季でも川岸の畑に水やりができるように川に堰を作りたい」との要望が出てるのでその場所、村はずれのきれいな川に案内してもらった。この時期水が少なく、向う岸まで歩いて渡ることができる。村人が作ったのか、簡易な堰があり、川岸の斜面が畑になっている。堰をつくる支援が貧困層にとって本当に必要な支援となるか、もっと慎重に調査してみないとわからないとJVCは考えている。

## 理想は最小の消費で最大限の幸福を

まだ自国の産業が発達していないラオスでは、水力発電の電力、銅などの鉱物資源、木材といった自国の自然資源の切り売りという手段で海外からの投資を呼び込み、経済発展を目指している。しかし自然資源を生活の糧とする村の住民は、お金がなくとも森や川があれば暮らしていく。その伝統的な暮らしを維持することはできなくなり、より貧しくなっていく。テレ



丁寧に、袋物を編む

ビやネットなど外からの情報も入ってくるようになり、そうなると現金収入を求めて出稼ぎに行くしかなくなり、そのためには村を離れる若者は多い。

最近読んだ本の中でE.F.シーマッハの「この現代経済学の仕組みの中では、多くを消費する人が、消費の少ない人より豊かであるという前提に立っているが、消費は人間が幸福を得る手段にすぎず、理想は最小の消費で最大限の幸福を得ることであるはず」という意味の言葉が紹介されていた。

ラオスの暮らしはこんなことに気付かせてくれる一つの貴重な事例である。そこから私たち日本の暮らしを改めて振り返り、さらに地球レベルでの持続可能な暮らしを考えることへつなげていければと思っている。

## 新規プロジェクト

### ■プロジェクト名

サワンナケート県農村部住民による自然資源の管理・利用支援プロジェクト

■期間 2018年3月1日～2021年3月1日

■対象地域 サワンナケート県 ピン郡5村  
アサパントン郡 5村 計 1,412世帯

住民が、地域の自然資源を主体的に管理、利用し続けていくには、外部者に対して村の状況を的確に説明し、権利を主張するなど住民意識の向上が不可欠である。

そのための活動として、村の基礎調査の結果や付近で採れる林産物の種類などを収集してデータ化し、また衛星写真を利用して地図化し村人と共有する。そのための村人への研修、専門性を持つJVCスタッフの育成にも力を入れていく。

地球の木として今回、プロジェクトのスタート時に現地訪問ができたことで、活動内容を決定するプロセスを垣間見られたことはとても参考になった。今後どのように村人に寄り添う具体的な活動として展開していくのか関心を持って見守っていただきたい。

(ラオスチーム 中野 真理子)

# はじめてのラオス

夜中の0時過ぎに羽田を出発、タイのバンコクを経由して次の日の午後(時差2時間)にサワンナケートの空港に到着した。ほんとに小さな空港で、あっという間に入国手続きも終わり、いよいよラオスだ。ああ、アジア！トウクトウクに揺られて街中へ、高層建物は皆無で静かで落ち着いた街だ。県を横断する国道9号(通称アジアハイウェイ)でまずは郡庁へ(郡長や担当職員へ挨拶、これなくしては勝手に村に入ることはできない)そしてさらに車でかなり入ったところに村の集落がある。道を横切る川が雨季には増水して通行不可にもなるという。のんびり水牛の群れが自由に草を食んでいる横を通り進むと目指す村の集落があるという感じだ。



高床の小屋(失礼)が並ぶ住居、床の下にはトラクター、精米機といったものや竹製で手作りの織機、ハンモックなどが置かれている。ニフトリ、豚、山羊、犬が子連れで歩きまわる。自給自足で暮らしてきた生活もグローバル経済の波が当然押し寄せている。ラオスは中国、カンボジア、タイ、ベトナムに接してお

り、様々な分野でその影響は大きい。ラオス政府は、低開発国からの脱却をめざし、援助より投資という政策を行い、こことごろ7%の経済成長を続けている。

JVCが支援する村は、都会から離れた貧しい村だ。森や川からの恵み、農産物、女性たちの手仕事による現金収入での村の生活も外国からの投資によるプランテーション開発や水力発電所の建設等で大きく変わろうとしている。村の人たちが自分の村の事をよく知り、考えて現状と今後について決めていくための糸口になる支援プログラムがJVCの若手スタッフにより進められている。とても地味で形としての成果が目に見えるのは時間がかかりそうだ。とはいっても状況は切迫しており、さらに保健、衛生面や教育など喫緊の課題も多い。

サワンナケートでであった女性たちは、たいていラオスの民族衣装であるシンという巻きスカートを着用していて、これが素敵だ。民族の誇りを失うことなく独自の文化を継承していくことも目標の一つであってほしい。行き過ぎた経済優先主義の犠牲者になってほしくないというのは、勝手な思い込みだろうか。

(理事 大嶋 朝香)

## アジアの国を知ろう

## 森の中で森の話 —ラオスの場合・瀬上沢の場合—

12月2日、横浜市栄区上郷の瀬上沢の森でラオスのワークショップが行われました。日本の森から、ラオスの森やそこの人々に思いを馳せ、また、森を失う事の意味や自分たちの暮らしについても考えたり感じたりしてみよう、という試みです。企画したラオスチームの2人と参加者6人は、ガイド役をお願いした「木タルの里瀬上沢基金」の田嶋さんと一緒に、「瀬上市民の森」に隣接する、小川が流れる小道や歴史的に貴重な遺跡の残る地域を歩きました。瀬上沢の森の一部は大型の宅地造成が決まっています。

市民の森とは違って放ったらかされ荒れている山道や周りの様子に、最初私は少し気持ちが引いたのですが、田嶋さんが立ち止まり説明してくれる毎に目が開くようになりました。上方から田に水を引いていたというトンネルは、柔らかいシダに覆われびっくりする位美しいし、田嶋さんが背中に立てていた網をやあら取って小川をさらうと、葉っぱに混じって何やらうごめくものが存外たくさんいるでした。きれいな水場にしかいないという何種類かのヤゴ(トンボの幼虫)、カワニナの稚貝など。

その後、良さそうなゆるい斜面(その昔、江戸に向かう人々が通った江戸道だそう)にみんなで座り込んで青空勉強会としま



した。いつもワークショップで使うラオスの国を紹介する写真はまわりの木の枝にぶら下げ、持参したラオスの生活グッズは、枯葉をザザツといわせながらお尻で移動して隣の人に渡す、といった具合。

自由にみんなで話して興味深かつたのは、アジアの森の木や土について話が及んだことでした。森の様子は比べるとそれぞれずいぶん違うようですが、同じなのは森と人のつながり。私たち日本人は森を里山と呼び、木の実や山菜を探ったり炭を作るために木を切ったりしてきました。ラオスの人々は森で食料としての昆虫や小動物を捕り、家の建築材料も調達します。残念ながら日本の里山はほとんど廃れてしましました

が、世界中がその方向でいいのでしょうか。「いろんな可能性を持った自然を守ることが大切」と言う田嶋さんの言葉が胸にしみました。不思議なもので、私の頭の中で世界の森がパチンとつながったような気がしました。地球は地続きなのですね。

その日は曇りでとっても寒く長居はできませんでした。でも「森の中で森の話」は大変効果があったのではないかという想いました。

(会報作成チーム 斎藤 和子)

## 変わりつつあるネパール ～NGOに求められることは？～



1月にネパールの支援地を視察した。現地NGO SAGUN(サグン)と一緒にやっているプログラムの進捗を確かめることと今後についての話し合いをすることがその主な目的であった。あちこちに新しい住宅や建設中の家が見られ、地震からの復興は進んでいるようだ。政府の発表によると70%の家の再建が完成し、残りの30%は半年以内に完成の予定だ。

「今、NGOの役割が問われています」と理事のカマルさんは開口一番言った。新しい地方分権の体制が整い、地域の人々が必要な事業を自ら進めることができるようにになった。2015年に新憲法が制定され、2017年には20年ぶりに地方選挙が行われ、各区(村は区になった。下記参照)に5人の代表が選出された。その内訳は男性3人、女性2人で、女性のうち1人は被差別カーストと決められている。これまで郡に下りていた予算が、区に直接下りるようになった。計画を決定するのはこれらの代表である。実施するのは中央政府から派遣された役人。幸せ分かち合いムーブメントは第2ステージに入った。

これまでの小規模プログラムは区の予算で充分できるようになつた。では、NGOは何を？ 予算が適切に使われるためには、健全な運営が必要となる。これまで行ってきた住民参加型の方法を広めること、良きリーダーを育て、役人の理解を深めることが重要となる。教育の面では、学校改革や高校生のアクションリサーチ(地域課題などに対して、改善に向けての実践、研究、実践を循環的に繰り返す活動)など、新しいシステムに若者が参画できるような、よりパワフルな方策が必要となる。地域の人々、地域行政と力を合わせながらより良い活動をしていくことがSAGUNの方針だ。地球の木でもネパール極西部の識字教室から発展して村人が自立した事例があり、方向性は同じである。

### 新しい支援地ポカリナラヤンスタン区

新しい体制では、行政村がより広い範囲を含むようになり、これまでの村は区になった。昨年度、ポカリナラヤンスタン区の参加型状況調査を行い、結果をまとめ分析した。人口4,040人、671世帯。タマン族が多い地域だ。人口の約3割が出稼ぎで

村から出ている。約8割が農業を営む。調査からはトイレ、水、妊婦の健康などの課題が浮かび上がる。家は昔ながらの、石で造った家が多く、地震で被害を受けている。平らな土地が少ない山の斜面に家々が点在し、痩せた土地からは1年分の食料が得られない家庭も多い。

### 手づくりの教材で教室に活気

第1期奨学生のプレムさんが、チャトリビバル小学校を案内してくれた。1年生の担任は、私たちが給与サポートしている教師の1人ユブライジさんだ。教室に入って驚いた。部屋中に手作りの文字のカードが紐で吊ってあり、ポケットがたくさん付いた単語カード入れもある。カラフルな出席表や生徒の作品も掲示してある。次にプレムさんの5年生の教室を見せてもらった。ここには果物の名前、穀物の名前、病気の名前など身近な単語が、ネパール語と英語で書いて貼ってあった。子どもたちの語彙を増やすための工夫だそうだ。他にも英語の自己紹介文の見本や、生徒が書いた先生へのメッセージなど、楽しげ溢れる教室になっていた。プレムさんは、昨年2月、勤めていた私立中学校から地元の小学校に赴任した。学校に改革をもたらす希望の星だ。「足りない物」ばかり要求していた学校が、「自分たちの持っている物」に気づいたことを心から嬉しく思っている。



プレム先生

### ヤギの飼育で出稼ぎを食い止める

マンガルタル、ラジャバース地区のヤギの飼育が始まって2年。参加者10人のうち9人が15,000ルピー(1ルピー=1円)の貸付金を返還することができた。この資金で雌ヤギを買い、子ヤギを増やして売る仕組みだ。返還後の資金は次のグループへと循環する。すでに7匹を売ったカンチマヤさんは、「今、雄の子ヤギが2匹いて、雌ヤギは妊娠しています。ヤギは順調に育って、とても楽しいです」と言う。一方、親ヤギも子ヤギも突然死んでしまったリナさんは複雑な表情だ。保険に入っていたが、書類の不備のせいか、保険は下りなかつた。今後は保険の見直しや専門家の巡回などが必要だ。

ポカリナラヤンスタン区でも同様のプログラムが始まり、25人が参加している。現金収入の道が少ないこの地域では、ヤギが希望をもたらしていた。ビンドウさんは、「生まれた雄を2匹売って、30,000ルピーの収入がありました。食料や子どもの学校の費用、服などに使いました。家の資金はこれからです」と話す。死亡例も多いが、研修で習ったことを忠実に実行

### ネパールを訪ねて

### 女性の活躍に期待！

2015年4月に起きた地震からの復興がどのように進んでいるのか、気になっていました。しかし、そのような心配はなくなり、とても力強く生き生きとした多くの女性たちとの素晴らしい出会いがあり、自分のあり方を考えさせられる訪問となりました。

そのひとりは今回この支援地を巡るプログラムをコーディネートしてくれたSAGUNスタッフのムクマヤさん。彼女は若いリーダーで、子育てをしながら、地域のために活動をしています。「私の1番は家庭。でも少しの時間を使って地域のため、国のために役立ちたい」と話してくれました。とても頼りがいがある、働き者のしっかり屋さんといった感じ。実は私たちが昼食をしている時、近くで車の事故が発生しました。するとムクマヤさんは「車を貸してほしい。救援に向かいたい」と私たちに申し出ました。私たちは見守る事しかできませんでしたが、彼女の行動には感銘を受けました。常に自分のできることで役に立ちたいと考えていることが行動に出たのだと思いました。

向かった先で、ヤギの飼育プログラムに参加する女性たちが丁寧に報告をしてくれました。成功して益々力をつけていこうとする人、ヤギを売った収入で子どもたちの学校で使うものが貢えたこと等、とても嬉しそうに話していました。うまくいっていない女性も決してしょんぼりしているわけではなく、「これから頑張る」というきらりと光るものがある様に見えました。また母親が参加できない家では

し、困った時は隣村に住むラルクマルさんに電話すれば、いつでもアドバイスをくれる。病院に行く前に家庭でできる手当について、会報誌「ロシ・ラハール」にも載せている。ホームステイ先のシータさんも参加者の1人。3匹の大きなヤギに子ヤギが1匹。子ヤギはトウモロコシの粉や小さい葉っぱの付いた枝など、大人のヤギとは違う飼料を食べていて、大事に育てられていた。

2007年から始まったカブレ郡ロシ地域での活動は、ネパールの怒涛の歴史と共に変遷していった。しかし、当初から目指してきた「村の発展は一から村人の手で」と言う方針は一貫している。地域の人々が力を持つためには、「参加型」を意識することが最も大切である。村人は無知で何も知らないのではなく、村人の知識や経験を引き出し、地域の発展に活かしていくことこそより良い村づくり、ひいては国づくりに役立つことだろう。振り返って、日本でもこのような取り組みが重要であることを再認識した。

(ネパールチーム 丸谷 土都子)



ムクマヤさん(左)、勝田さん(チームメンバー)、筆者(右)

娘が出席し、大人に交じってしっかりと話をしてくれたことにも将来性を感じました。

大きな歩みを感じたのは、地域へ向けた予算が配分され、地域の裁量がより発揮できるようになったこと。選挙で選ばれた村長は「子どもの教育。健康を守る。道を造る」など、政策を語ってくれました。また多くの女性が選出され活躍の場をひろげていきました。ネパールでは新たな仕組みに慣れずに混乱していることも確かだと思いますが、変えていくことをするこの勢いは人々を元気に、生き生きとさせていているように感じました。

私は、貧困家庭が増加し、格差が拡大している日本の現状を思い浮かべ、今のままで市民参加のまちづくりを進めることができ難しいのではないか、今一度何をすべきなのかを考える時が来ていると感じました。

地球の木の活動は、はじめは支援という形の出会いかもしませんが、交流を重ねて行くうちに多くのことをお互いに学び合うことなのだと考えました。

(理事長 堀 千鶴)

## とても嬉しいニュースがありました

地球の木のクラフト販売、生活クラブ生協向けの共同購入などで扱っているシルクスカーフ等の生産者のホー・チヨムナムさんがカンボジア日本人材開発センターアクセラレーター・プログラム クラウドファンディング(CJCC Accelerator Program(CJAP) 2018 Crowdfunding)に選ばれ、昨年12月に来日しました。

これはカンボジア日本人材開発センター(JICAが王立プノンペン大学との共同プログラムとして2004年に設置)がカンボジアの成長意欲の高い10社の起業家を対象として、約8ヶ月間実際に必要な支援(ビジネス面、金融面など)を集中的に提供する起業家育成プログラムです。

昨年12月5日に都内のJICA本部で行われたファンドレイジングイベントに私も出席しました。カンボジア全国から100社以上の応募があった中からチヨムナムさんの「フェアウェイブ」がまず、10社の中に選ばれ、その中から最初に来日してファンドレイジングを行う3社として選ばれた経緯を伺いました。それぞれ、カンボジアの社会問題への真摯な取り組みが評価されています。

そして、チヨムナムさんのプレゼンテーションは、農村における女性たちの厳しい教育環境、経済状況などを改善し、女性



の雇用を増やし、公平かつ継続的に適正な賃金を受け取れるようにするための資金としてのファンドレイジングの呼びかけでした。

これまで、チヨムナムさんと共にシルクを織っている現地に赴き、いろいろお話を伺う中で、社会的な問題意識、女性たちの働き方への取り組みなどが、非営利協同、生活協同組合、あるいはNPOに大変近いことを理解していましたが、改めて問題解決への強い意欲を感じました。

イベントの後で関係者の方からチヨムナムさんがこのプログラムに応募した時のプレゼンテーションで、地球の木の共同購入のカタログチラシを使ってアピールしていたと伺い、大変嬉しく、誇らしく思いました。

地球の木の定款第5条(1)②には地球の木設立の目的を達成するための事業として「相互の自立に役立つ生産物の交易」とあります。私たちはこの言葉のように、フェアトレードを取り扱うことによって、お互いの自立を考える機会をもち相互理解を深めています。

(理事 植田 泉)

\*このファンドレイジングは1月31日が締め切りでしたが、3社とも目標を達成しました。



### もうすぐ10年

以前「スタディツアーに参加して3年半」と題して投稿させて頂き、冒頭に「ある出会いや体験がその後の生き方を変えてしまう」と書いた記憶がある。それからさらに数年を経た。果たして今の自分はどうなっているのか、その状態は変わりなく続いているのか？それともやはり、元の状態に戻ってしまったのか？

2010年、定年退職して間もない私は、定年後の長きにわたる生活について何の目標も方向性も持てぬままにいた。現役の時はあれもこれもと山ほどあったやりたい事は半年もたたないうちにやりつくした感があり、「もういいかな」という気分に落ち着いてくる。生来の人付き合いが苦手、社会事象に関心が薄い、集団行動が嫌い、かと言って没頭できるような趣味も持たない、ちょっとひねくれた変わり者。まあ晴耕雨読でたまには旅行でもなどと漫然と考えていたが、何か満たされない感と不安を引きずっていた。そんな折、知人からスタディツアーのお誘いを受け、深く

考えもせぬ「行ってみるか」と軽い気分で参加。だがしかし、このことが大きなターニングポイントになるとは…。

どんなに強烈で刺激的な体験も、時間とともに薄れてしまうのは仕方ないことである。だが、それは10年近く経った今もなお圧倒的なリアリティを保ったまま続いている事に驚く。そして翌年、東日本大震災が発生。すぐに各地域の被災地支援に延べ2ヶ月間赴く。誰に相談するでもなく、また、誘われた訳でもなく。これは自分としてはかなり珍しいこと。こんな行動がとれたのもスタディツアーでの体験があったからこそ。この2つの出来事は、その後とても大きなものになっていた。

一つの流れができるとその中で人との出会い、繋がりが生まれ、自然と様々な方向に広がっていく。そして今、気が付けば地域、社会、団体等など、色々な場面に関わっている自分がいた。そして、それに連動するかのように周りの景色がこれまでと違って見えてくるのだった。むしろこちらの方が大きなことかもしれない。

声を掛けてくれた知人、地球の木の皆さまへ、今更という感もあるが改めて感謝と御礼を申し上げたい。

(ネパールスタディツアー2010参加 増田 新治)



## おせち料理から世界が見える?!

12月13日神奈川区民活動センターで出前講座「おせち料理から世界が見える」のワークショップが開かれた。新しい年、お正月を祝うおせち料理の食材がどのようにして私たちの手に届くか考えてみようというワークショップである。

はじめに出席者は3グループに分かれて用意されたおせち料理名からその食材がどこから届くのか考えた後に生産地が明かされ、日本中だけでなく世界中から食材が運ばれ、ゴマまでがアフリカから何百キロもかけて輸入されているのには驚かされた。

ここでファシリテーターから「フードマイレージ」という聞きなれない言葉が紹介された。「フードマイレージ」とは、食材の生産地から消費される食卓までの輸送に関した(重量×距離のこと)。「フードマイレージ」が大きければ輸送にかかる燃料により排出されるCO<sub>2</sub>の量が増え、地球環境に与える負荷も大きくなる。日本のフードマイレージは世界1位で、食料輸入大国のこと。

そこで、私たちが毎日食べている食材を国産にできるか？食料自給率が39パーセントの現状では不可能であるという。私たちの食卓は、戦後1960年代からの経済発展により食生活の洋食化や世界の国々の料理を味わえる楽しさを知って、米や身近な魚を中心とした戦前からの食生活がガラリと変わった。その結果、日本の生産者、地球環境、輸入食品の量、私たちの生活習慣にまで変化を与えてることが理解できた。

参加者から、「日頃、真剣に考えたことのないテーマで考えさせられた」、「毎日の食について改めて考える機会になった」等の感想があった。「食べる」とを真剣に考えさせられたワークショップだった。

(会報作成チーム 柏柳 妙)



講師は山崎信子さん



2月2日、3日にみなとみらいのJICA横浜で開かれたフォーラム。国際協力・多文化共生に関する団体が聞く講座は、実に多彩です。今回地球の木は、「他国で生活するということ」というワークショップを開きました。地球の木の支援地ネパール・カンボジア・ラオスをいろいろな角度から知ってもらうカードゲーム「ようこそ！ぼくの国、わたしの村」が初登場。このゲームは3つの支援チームのメンバーたちが力を合わせて作り上げたもので、なかなかの力作！参加者同士の会話も弾み、最後に日本との共通点や相違点なども考え、もし彼らが日本に暮らしたらということを想像してみます。さらなる進化も期待大です。

(会報作成チーム 沼田 由美子)



## 地球の木カフェ @茅ヶ崎

11月24日、思春期の子どもを持つ母親グループ「思春期カフェ」で、ネパールワークショップをしました。

「ネパールわくわくバッグ」から出てくるグッズを手に取って、ネパールの暮らしを想像した後、オリジナル紙芝居「デブラニ物語」で学ぶことの意味を考えました。写真を見せながら活動紹介をすると、好奇心旺盛な参加者から1時間に亘る質問の嵐。カフェが終わってからも子どもとの付き合い方について話し込んだり、最近地域に増えたネパールの子どもたちやあ母さんたちの、日本語ができないための不安をどう解消してあげたらいいかなど現実的な問題について真剣な論議がありました。

この出会いを大切にこれからも繋がっていきたいと思います。

(ネパールチーム 乳井 京子)

### 活動日誌(12月～2月抜粋)

#### 12月

- 1日 デポー展示会(ほんもく)
- 1日 JVC国際協力コンサート物販(三軒茶屋)
- 2日 アジアの国を知ろう  
森の中で森の話
- 3日 第7回理事会
- 3、4日 デポー展示会(つなしま)
- 7、8日 デポー展示会(東寺尾)
- 13日 あせち料理から世界が見える？!

#### 1月

- 10、11日 デポー展示会(ひらつか)
- 11日 第8回理事会
- 13～19日 ネパール調査訪問(堀、丸谷、勝田)
- 19日 ネパールスタディツアー説明会

#### 2月

- 2日 よこはま国際フォーラム2019(みなとみらい)
- 4日 第9回理事会
- 18日 JVCラオスプログラム中間報告
- 22～26日 カンボジア訪問(成瀬、植田、竹内)

## 第20回地球の木総会のお知らせ

【日時】5月25日(土)13:30~16:30

【会場】関内ホール地下2階(横浜市青少年育成センター第1研修室)

※詳細は同封の「第20回地球の木総会のお知らせ」をご覧ください。

## 幸せ分かちあい年末募金 ご協力いただきありがとうございました

今年も会員の皆さまをはじめ、85名を超える方からご協力をいただきました。

皆さまのあたたかいお気持ちに心より御礼申し上げます。

年末募金総額:543,520円

<寄付先別内訳>

・ネパール 幸せ分かち合いムーブメント	142,000円	・カンボジア DV/レイプ被害者支援	56,000円
・ラオス 森林と農業プログラム	40,000円	・無指定	305,520円

\*————— 領収書を2019年1月29日に発送いたしました。—————\*



## 地球の木カレンダー2019

## ご協力いただきありがとうございました

今年は631冊ご購入いただきました。

カレンダーの収益は、ネパール・ラオス・カンボジアの支援に使われます。  
皆さまのご協力に心より御礼申し上げます。

### イベント情報報

#### ●映画上映会「甘いバナナの苦い現実」&トーク

あなたはどんなバナナを食べていますか？日本で一番愛され、食べられているバナナ。バナナはどのように作られているのでしょうか。この映画を見て、身近なバナナのこと、知ってみませんか？

(詳細はチラシをご覧ください)

日 時:4月13日(土)13:30~16:00

場 所:関内ホール地下2階

(横浜市青少年育成センター第1研修室)

参 加 費:500円

講 師:石井正子氏(立教大学教授)

お申込み:お電話・FAX・Emailで

地球の木事務局まで。

#### ●ちがさきサポセン☆ワイワイまつり

日 時:3月30日(土)10:00~15:30

場 所:茅ヶ崎中央公園

クラフト販売と活動紹介で出店します。

デ  
ポ  
ー  
展  
示  
会

3月15日(金)	ほんもく
16日(土)	〃
3月25日(月)	東寺尾
26日(火)	〃
4月月6日(土)	たかつ
7日(日)	〃
4月10日(水)	すすき野
11日(木)	〃
4月22日(月)	南林間
23日(火)	〃



特定非営利活動法人  
**地球の木**



長い間があっての編集会議。みんなの顔が揃う。プライベートな話もしたいけどぐっと我慢して本業に専念する。頭をつき合わせ原稿を読み合って、ああでもなしこうでもなしーとみっちり4時間余。みんなで知恵を出し合うのって気持ちのいいものですね。(K.S.)